黄金のウナギ (1979)

ZLATI UHORI
GOLDEN EELS

メディア TVM

ジャンル ドラマ

製作国 チェコスロヴァキア

公開情報 劇場未公開・NHK教育で放映

【解説】

テレビの賞では権威あるイタリア賞を受けた秀作テレビフィーチャー。旧チェコスロヴァキアの田舎に祖母が残した家に移り住もうという家族の、車での旅を白黒でノスタルジックに捉えるところから始まる。こうしたコミカルで軽快な調子はチェコ映画が総体に持つ特質で、第二次大戦の一家離散に材を採りながら、落ち込ませずに見せて、静かに反戦の主張を伝えるのだ。オタ・パベルの自伝的小説が原作で、一家の三男の目を通して、魚の宝庫である河を擁した自然味豊かな地方の暮らしが描かれ、実際、釣り好きには堪えられないであろう映像のオン・パレード。題名の“黄金のウナギ”とは、大量に川を上ったウナギが白い腹を陽光に輝かせる様を言ったもので、主人公の父は再三再四、その話を彼に語って聞かせる。自分は未だ見たことはないが、きっとおまえは見るだろう、と。少年の釣りの指南役はもう一人いる。父が魔法使いと崇める、渡し守りのプロシェックおじさんだ。そして、初めて女性として意識した美しい酒場のおカミさんに、彼は手づかみで捕らえた岩魚を贈る。それはまだ小さくて、彼女に意見された少年は、何か罪を犯した気がして穢れを川に洗い流そうとするのだった。ある日大量のキノコが森で獲れた。戦争の前触れーとの言い伝えを恐れる母の予感は的中。独軍が侵攻し、やがてユダヤ系の父と、年長の兄たちは收容所送りとなる。父のためと釣ったウナギは燻製となって別れの食卓にのるが、塩がきつくて食べられず、兄弟はこれを手厚く葬った。占領軍に魚釣りを全面禁止にされてもなお母のため釣り続ける少年は、父の言葉を反芻する。遂に母まで、そして、抵抗運動をする夫をかばったおカミさんもナチに連行されていく。おじさんに預けられた少年は、二人で釣ったウナギが黄金色に輝いて帰還するのを祈って、それを川に放つのであった。

【クレジット】

監督	カレル・カヒーニャ	Karel Kachyna
原作	オタ・パヴェル	Ota Pavel
脚本	カレル・カヒーニャ	Karel Kachyna
音楽	ルボシュ・フィシエル	Lubos Fiser
出演	マルチン・ミクラージュ	Martin Mikulas
	ウラジミール・メンシーク	Vladimir Mensik
	ルドルフ・フルシンスキー	Rudolf Hrusinsky